

意識と象徴の沖縄アイデンティティ —— 第5～7回世界のウチナーンチュ大会（2011・2016・2022年） 調査の結果から ——

野入直美

- I. 研究課題と方法
- II. 沖縄アイデンティティの持続と変容
- III. ネットワークの実績と大会成果
- IV. 結論

キーワード：「世界のウチナーンチュ」、海外沖縄県系人、沖縄アイデンティティ

I. 研究課題と方法

1. 世界のウチナーンチュ大会と参加者

本稿では、1990年からおよそ5年に一度、開催されてきた世界のウチナーンチュ大会（以下、大会と表記）のうち、第5回（2011年）・第6回（2016年）・第7回（2022年）大会における参加者アンケート調査（以下、大会調査と表記）によって得られたデータを用いて、海外に在住する沖縄系の人びとのアイデンティティを分析する。

大会は、沖縄県が主催し、約43万人に及ぶ海外在住の沖縄県系人（沖縄系の海外移民とその子孫たちなど）が主要な参加者となり、母県である沖縄に集って相互に、また沖縄県民と交流し、絆を確かめ合うイベントである。参加者数は回を重ねるごとに増加し、第6回大会では、海外と国内（沖縄県外にある沖縄県人会などからの参加者）を併せて7,956人の参加者があったが、第7回大会はコロナ禍によって1年の開催延期を余儀なくされ、参加者数は3,693人へと減少した¹⁾。

大会参加者を対象とする大会調査は、これまでに第4回（2006年）から第7回大会までの4回を、16年にわたって共同研究により実施してきた²⁾。参加者数と有効回答数の推移は表1のとおりである。筆者は、第5回調査を実質的に統括し、第4回、第6回、第7回調査に参加した。

継続的調査として実施したことにより、一貫して問い続け、回答傾向の持続や変化をとらえることができた項目がある。属性としては出身地、日本語力、性別、年齢、学歴、職業、沖縄県人会への参加の有無、意識としては大会の参加動機などである。本稿の主題である沖縄アイデンティティをめぐる意識については、第5回大会調査（2011年）から継続的に

表1 大会参加者数と有効回答数の推移

単位:人

開催年	参加者数			有効回答数 (回収率)							
	海外	国内	計	海	外	国	内	県	内	計	
第1回大会 1990	2,397	—	2,397	—	—	—	—	—	—	—	—
第2回大会 1995	3,409	513	3,922	—	—	—	—	—	—	—	—
第3回大会 2001	4,025	300	4,325	—	—	—	—	—	—	—	—
第4回大会 2006	4,393	544	4,937	600	13.7%	8	1.5%	25	—	705	—
第5回大会 2011	5,317	2,046	7,363	651	12.4%	90	4.4%	252	—	1,045	—
第6回大会 2016	7,353	603	7,956	381	5.1%	35	5.8%	677	—	1,093	—
第7回大会 2022	1,790	1,903	3,693	257	14.4%	65	3.4%	343	—	665	—

参加者数は各回の大会実行委員会事務局調べによる。国内参加者は沖縄県外にある県人会からの参加者などであり、会場に足を運んだ沖縄県民は含まれていない。

問いを設け、分析を続けてきた。

大会調査は、海外沖縄県系人の意識調査としては、規模と継続性において最大のものである。また、複数の国々に居住するエスニックグループの統計調査としても、ユニークなものとなっている。一方で、調査メンバーの入れ替わりと問題意識の変化によって、毎回、質問項目が更新されたため、16年間というスパンで大会参加者の意識や行為の変容を詳細に分析することは難しい。また大会には、海外からの渡航費を賄える経済力と、沖縄系の活動への関心がある人びとが多く集まっているという、参加者のバイアスも存在する。とくに第7回大会では、後述するように中南米からの参加者が大幅に減少し、アメリカ合衆国からの参加者の比率が増加した。コロナ禍は、海外参加者における経済的なバイアスを押し広げたとと言えるだろう。この調査データが、必ずしも海外の沖縄系の人びとの意識の総体を示しているわけではないことには留意が必要である。本稿は、これらの限定を踏まえつつ、これまでの大会調査で得られたふたつの仮説の検証を試みる。

2. 2022年調査をめぐる限定性

第7回大会の海外参加者(参加者全体)の居住地は、アメリカ合衆国が前大会4274人(58%)から今大会1306人(73%)へと、人数は3分の1以下に減ったが、海外参加者に占める比率は大幅に伸び、海外参加者の圧倒的多数を占めるようになった。一方で、中南米からの参加者数は、前大会2440人(33%)から今大会338人(19%)へと、人数は7分の1に減り、構成比においても大幅に下降した。とくに第6回大会では参加者が千人を超えていたブラジルが第7回大会では百人を下回り、第6回大会に比べて人数で13分の1に大幅減少した。アンケートの回答者数も、アメリカ合衆国居住者が海外参加者の78%

表2 海外から参加した回答者の居住地と回答者数
（第7回・第6回大会）

エリア	国・地域	単位:人			
		第7回大会有効 回答者数 (%)		第6回大会有効 回答者数 (%)	
北米	アメリカ	199	77.4%	205	53.8%
	（うちハワイ）	96	37.4%	62	16.3%
	カナダ	1	0.4%	26	6.9%
中南米	ブラジル	19	7.4%	41	11.0%
	アルゼンチン	8	3.1%	37	9.7%
	ペルー	15	5.8%	25	6.6%
	ボリビア	2	0.8%	5	1.3%
アジア	韓国	2	0.8%	2	0.5%
オセアニア	ニューカレドニア	6	2.3%	1	0.3%
	オーストラリア	1	0.4%	0	0.0%
	無回答	4	1.6%	8	2.1%
	その他	—	—	31	8.1%
合計		257	100.0%	381	100.0%

に達し、ハワイ州だけで37%となり、第6回大会調査（アメリカ合衆国54%、ハワイ州16%）を大幅に上回った。中南米の比率は、28%から17%に下降した（表2）。

筆者は、2016年のデータ分析にあたり、ブラジル、ハワイ、ハワイ以外の北米という3つの主要な地域カテゴリーを設け、海外参加者の沖縄アイデンティティを比較した。しかし2022年の分析では、参加者数が大幅に減じたブラジルを、ハワイ、北米との比較に用いることができなくなった。さらにブラジル参加者の大幅な減少は、地域分析だけでなく、移民世代分析をきわめて困難にした。

2022年データにおいて、沖縄系の海外参加者の移民世代は、三世が46%と半数弱を占め、二世と四世が同数でそれぞれ20%となり、一世は13%であった。しかし、この「一世」もまた、圧倒的多数が、戦後移民のなかったアメリカ合衆国からの参加者なのである。したがって、その「一世」の内実は留学、海外勤務、国際結婚などによるトランスナショナルな移住者であると考えられる。戦後移民が渡航した中南米、とくに移民数が多かったブラジル参加者が大幅に減少したことにより、2022年調査では、海外移民の第一世代としての一世を十分に捕捉できなかった。もちろん現代的な海外移住者についても、文化継承やアイデンティティ分析をすることは可能である。しかし、継続的な調査のデータとして過去のデータの「一世」と比較することには、妥当性において懸念がある。そのため本稿では、これまで行ってきた移民世代による沖縄アイデンティティの分析を断念した。

2022年大会において、中南米からの参加者が大幅に減少した主要な原因は、コロナ禍であった。ただし、それ以前からブラジルを初めとする中南米の戦後移民は高齢化し、「戦後移民一世」をひとつの層としてとらえることは困難になってきていた。コロナ禍はその動向を加速させたのであって、次回大会においても、かつてのように中南米から戦後移民一世が大挙して参加するという状況は見いだしがたいと思われる。

3. 検証を行うふたつの仮説

(1) 沖縄アイデンティティの構築性

本稿で検証を行う第一の仮説は、沖縄アイデンティティの構築性についてである。

2011・2016・2022年の大会調査では、「あなたが考える『ウチナーンチュ』とはどのような人ですか」という問いを設け³⁾、「沖縄で生まれた人」「祖先が沖縄本島あるいは離島出身である人」「自分は『ウチナーンチュだ』と思っている人」などの選択肢から、複数回答可で回答者に選択してもらった。

2011年には、沖縄県内からの参加者と海外からの参加者に、「ウチナーンチュ像」において大きな違いが見いだされた。どちらも沖縄への愛着が上位に来ることは共通していたが、県内参加者は「沖縄での出生」項目が最上位で、「祖先のルーツ」は下位に位置づいた。一方で、海外からの参加者は「祖先のルーツ」を重視し、逆に「沖縄での出生」は下位となった。移民世代別の分析では、一世は「沖縄での出生」を選ぶ人が選ばない人よりも多く、二世で選択と非選択の比率が拮抗し、三世ではこの項目を選ばない人が過半数となった。逆に、移民世代が推移するのに伴って選ばれる比率が上がる項目は、「祖先のルーツ」であった⁴⁾。

このことから、「ウチナーンチュ像」の構成要素は、回答者自身にあてはまるものが選ばれやすく、逆に当てはまらないものは選ばれにくいという傾向が見いだせた。ここから導かれた仮説は、沖縄アイデンティティの動的な構築性であった。もともと沖縄島に固有に存在するアイデンティティが移民によって海外に伝わり継承されてきたというよりも、国境を越えた移動や世代の推移そのものが、「ウチナーンチュとは何か」ということを新たに意味づけ、構成してきているというものである。

2016年の第6回大会調査では、この仮説に概ね当てはまる結果が見いだせた。一方で、県内参加者において「沖縄での出生」回答の比率が減り、「祖先のルーツ」回答が増え、結果として県内参加者の沖縄アイデンティティが海外参加者のそれに近接するという興味深い傾向が見いだせた。本稿において検証する第一の仮説は、この沖縄アイデンティティの構築性である。

(2) <島嶼コミュニティ型>と<大陸ネットワーク型>という二類型

第二の仮説は、海外沖縄県系人の居住地の特徴を抽出した仮説的類型で、ハワイの<島嶼コミュニティ型>とブラジル、北米の<大陸ネットワーク型>というものである。

2006年の第4回大会調査では、有効回答765のうちハワイ(277)とブラジル(77)を抽出し、比較を試みた。その結果、ハワイ参加者は相対的に日本語力が低く、沖縄系移民、とくに戦前移民にルーツを持つ三世が多いという同質性が際立っていた。県人会の継承では「うまくいっている」という回答の比率が相対的に高く、海外のウチナーンチュとの交流意欲は相対的にやや低い、という結果が出た。一方でブラジルは、相対的に日本語力は高く、参加者に占める沖縄系は多いが、戦前移民と戦後移民を含んでいるという点で多様性が見出せた。県人会の継承ではハワイよりも困難があり、海外のウチナーンチュとの交流意欲は相対的に高かった⁵⁾。

このことから、ハワイにおいては、島嶼という地理的な条件と沖縄県系人の集住という社会的要件を背景として、沖縄系の人びとは、ハワイの中だけでも相当に沖縄コミュニティの恩恵を享受しており、特にハワイ外の海外同胞と交流しなくてもある程度は自足しているという<島嶼コミュニティ型>という仮説類型を導き出した。一方でブラジルは、広大な大陸に散住しているために県系人の動員や全国規模での活動が困難なのだが、そのことが海外との交流に期待する積極性にもつながっているという、<大陸ネットワーク型>という仮説類型を導き出した。展望としては、従来は凝集性に優れたハワイが「世界のウチナーンチュ」のネットワーク化を牽引してきたが、島嶼・集住という要件を満たしている地域はまれであることから、今後はむしろ<大陸ネットワーク型>が汎用性を増していくのではないかという仮説である⁶⁾。

2022年大会はブラジルからの参加者が大幅に減少したため、本稿ではハワイと、ハワイを除くアメリカ合衆国（以下、北米と表記）を比較することにした。

II. 沖縄アイデンティティの持続と変容

1. アイデンティティの生得性／獲得性の推移

ここでは、「ウチナーンチュとはどのような人か」という「ウチナーンチュ像」を通じて、大会参加者の沖縄アイデンティティを分析する。回答者によって選ばれやすい項目とそうでない項目の比率に着目し、県内・海外参加者の意識の相違と共通点を明らかにする。海外参加者の中では、ハワイ、北米と中南米という3つのカテゴリーで比較を行う。そして、2011年の第5回から2022年の第7回大会までの沖縄アイデンティティの変容について考察する。

2011年・2016・2022年の大会調査では、「あなたはご自身をウチナーンチュだと思いま

すか」という問いを設けた。これには圧倒的多数の参加者が肯定的に回答するため、回答者の属性による差異がほとんど生じず、居住地などの属性による分析は難しかった。そのため筆者は、「ウチナーンチュ像」を尋ねる問いを用いて沖縄アイデンティティ分析を行ってきた。「ウチナーンチュ像」を用いるのは、回答者によって重視される項目と、逆に選ばれにくい項目が、多様な形で展開されるからである。項目の順位づけと、項目ごとの選択／非選択の比率の分析を行うことで、回答者の属性による意識の差異や重なり、2011年から2022年にかけての意識の変化を追うことができる。

「ウチナーンチュ像」の問いには、エスニック・アイデンティティの構成要素を踏まえて、回答の選択肢を設けた。それは、「沖縄で生まれた人」「沖縄で幼少期を過ごした人」「親のどちらかが沖縄本島あるいは離島出身である人」「祖先が沖縄本島あるいは離島出身である人」「沖縄に住んでいる人」「しまくとぅばを少しでも話せる人」「沖縄の文化・歴史のことを詳しく知っている人」「沖縄に貢献しようという気持ちを持っている人」「自分は『ウチナーンチュだ』と思っている人」「沖縄が好きの人」というものである⁷⁾。

これらのうち、「沖縄出生」「幼少期の沖縄経験」「親の出自」「祖先のルーツ」という前半の4項目は、本人にとって生まれながらの所与の要件である。これらは、エスニック・アイデンティティを構成する<生得的要素>にあたる。そして、「しまくとぅば」「文化・歴史の知しつ」「貢献意欲」「主観」「愛着」の5項目は、<生得的要素>に影響を受けつつも、本人が意識的に習得したり取捨選択したりすることが可能な、エスニック・アイデンティティの<獲得的要素>である。「現在の沖縄居住」は、自分の意思によって実行可能ではあるが、海外の沖縄県系人にとってハードルが高い。これについては、<獲得的>と<生得的>の両方にまたがっており、どちらかといえば<生得的>と見なす。

<生得的／獲得的要素>の分類は、エスニシティ概念の「原初性」と「機動性」に対応している⁸⁾。1970年代以降、アメリカの公民権運動をひとつの発端として、マイノリティ集団が権利と尊厳の回復を求めるエスニック・ムーブメントが世界的に広がった。その潮流を背景として、社会学的なエスニシティ研究では、エスニシティを、もともとそのように生まれつく個人の特性や、集団が自然なものとして内包してきた他集団との差異といった「原初性」よりも、個人や集団が意思と行動によって獲得していく「機動性」が重視されるようになっていった。とくに1990年代以降は、カルチュラルスタディーズの影響下、複数帰属性や故郷喪失性などを含意する「ディアスポラ概念」や「混淆(ハイブリディティ)」に対する関心が高まり、エスニシティの固有性や本質性を、ひとつの言説と見なして相対化しようとする構築主義が興隆した。

筆者が2011年の大会データによって導いた仮説は、沖縄アイデンティティが、もともと沖縄系として持って生まれたものではなく、移動と世代の推移の中で意味づけられ、変

容してきたものであるというものだった。この仮説は、構築主義的なエスニシティ研究の潮流に重なっている。2016年大会調査データにおいて、この仮説は概ね検証された。ここでは2022年の大会調査データを用い、さらなる考察を試みる。

2. 海外参加者と県内参加者の「ウチナーンチュ像」比較

2022年調査では、海外参加者の「ウチナーンチュ像」ランキングにおいて「祖先のルーツ」が最上位となり、2011年と2016年に最上層にあった「主観」と「愛着」を上回った。一方、沖縄県内参加者は「主観」と「愛着」、次いで「貢献意欲」が2016年と同様に上層を占め、また海外参加者からは選ばれにくい「沖縄での出生」が順位を上げた。その結果、海外参加者と県内参加者の「ウチナーンチュ像」の差異は拡大した。

「祖先のルーツ」を重視する意識は、2011年の大会調査で、ハワイ参加者において顕著に見いだされたものである。ハワイには中南米のように戦後移民が渡航せず、また北米に比べて海外勤務や留学などの現代的な移住者も少ないことから、多くの沖縄県系人が戦前移民にルーツをもつ均質性の高いコミュニティが成り立ってきた。そこで「祖先」はきわめて重要なシンボルとして、帰属意識の拠り所となり、沖縄系コミュニティの凝集力を高めてきたのである。2011年と2016年大会は、ハワイ参加者が多かったことで「祖先」の選択率が押し上げられてきたのだが、他の地域にも「祖先」重視が見いだせた。さらに2016年には、県内参加者においても「祖先」の選択率が上がるという興味深い動向が見いだせた。

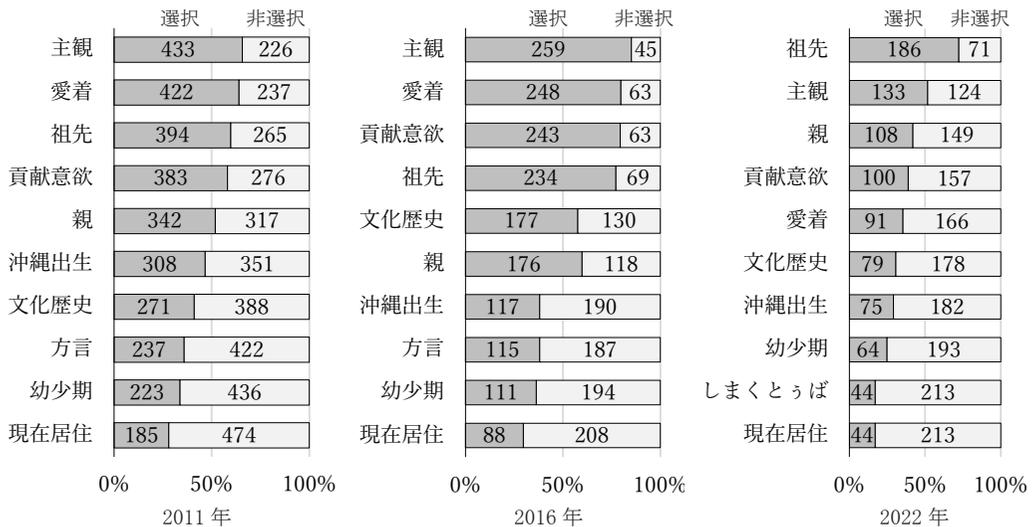


図1 海外参加者ウチナーンチュ像順位（2022）

表3 海外参加者のウチナーンチュ像（2011・2016・2022年）

単位:人,%

	2011年			2016年			2022年		
	選択	非選択	選択率	選択	非選択	選択率	選択	非選択	選択率
出生	308	351	46.7	117	190	38.1	75	182	29.2
幼少期	223	436	33.8	111	194	36.2	64	193	24.9
生得的要素 親	342	317	51.9	176	118	57.3	108	149	42.0
現在居住	185	474	28.1	88	208	27.7	44	213	17.1
祖先	394	265	59.8	234	69	76.0	186	71	72.4
主観	433	226	65.7	259	45	84.4	133	124	51.8
愛着	422	237	64.0	248	63	80.8	91	166	35.4
獲得的要素 貢献意欲	383	276	58.1	243	63	79.2	100	157	38.9
文化歴史	271	388	41.1	177	130	57.7	79	178	30.7
方言	237	422	36.0	115	187	37.5	44	213	17.1

ランキングの最下位には「しまくとぅばを話す力」が、「現在の沖縄居住」と並んで位置づいた。アイデンティティの〈獲得的要素〉の中では、自分をウチナーンチュだと思いう「主観」や、沖縄への「貢献意欲」などの難易度の低い項目は選ばれやすく、「言語」のような難易度の高い項目は選ばれにくいのである。この傾向は、2011年、2016年、2022年調査において、概ね一貫して見いだせた。沖縄が好きという「愛着」は、難易度の低いく獲得的要素>なのであるが、2022年にランクが下がった。ただし、後述するように海外参加者の意識はいちようではなく、内部には多様性が見いだせた。

2022年に首位となった「祖先のルーツ」ではあるが、選択率は2016年よりも低下している（表3）。2022年調査では、項目の選択率は全般的に2016年よりも低調であった。とくに「主観」と「愛着」の選択率が低下したことで、「祖先」は相対的に浮上したとも言える。

2011年と2016年には圧倒的だった「主観」と「愛着」の優位性は、2022年には維持されなかった。「貢献意欲」なども、選択率は下がっている。海外参加者の沖縄アイデンティティにかかる2022年データの特徴は、「主観」「愛着」をはじめとする〈獲得的要素〉が圧倒的な優位性を失い、〈生得的要素〉は「祖先のルーツ」だけが突出し、「沖縄で出生」などの項目は非選択率が高まったということである。

県内参加者の「ウチナーンチュ像」は、興味深い変動を見せた（図2）。2016年と2022年を比べると、上位3位が「主観」「愛着」そして「貢献意欲」であることは変わっていない。一方で「沖縄での出生」は、2011年に最上位であり、2016年には下から3番目にまでランクを下げていたのだが、2022年には4位にまでランクを上げた。その下には、2016年

(野入直美)

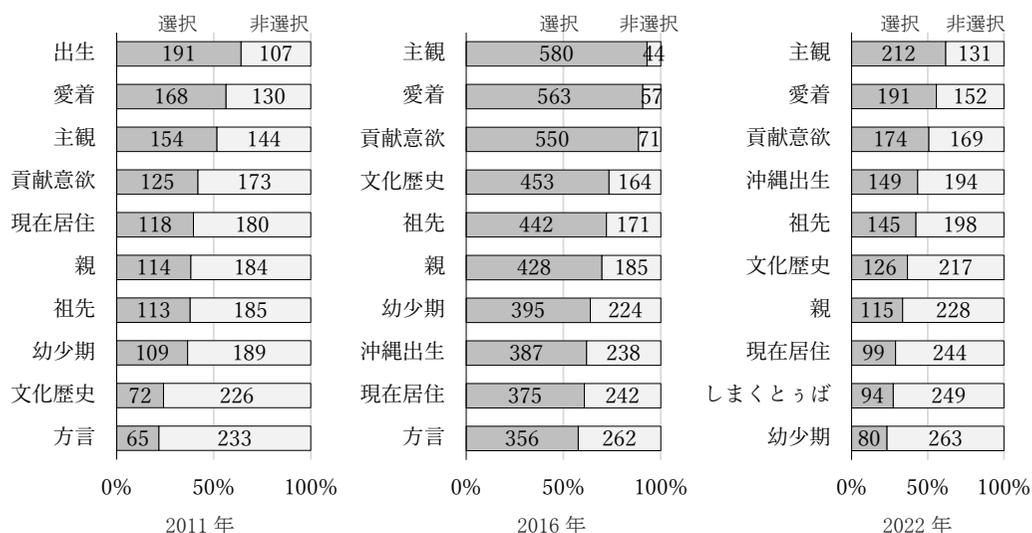


図2 県内参加者ウチナーンチュ像順位 (2022)

と同様に「祖先のルーツ」が位置づいている。ただし、県内参加者の選択率も2022年には概ね低調であり、4位の「沖縄での出生」以下は、選択率よりも非選択率のほうが高くなっている。最下層には、「幼少期の沖縄経験」と「しまくとぅば」がある。

県内参加者の沖縄アイデンティティは、2011年には「沖縄での出生」を最重視する＜生得的要素＞の優位性によって、海外参加者とは異なるものとなっていた。筆者はそこから、「沖縄アイデンティティの構築性」という仮説を導き出した。ただし、「主観」と「愛着」が上層であることは、海外参加者と県内参加者に共通していた。それが2016年には、県内参加者において＜生得的要素＞の優位が失われ、「祖先」という海外参加者が重視してきた象徴的なアイデンティティを、県内参加者もまた選択する傾向が見いだされた。「主観」「愛着」「貢献意欲」が最上層に位置づくことで、県内参加者の沖縄アイデンティティは＜獲得的要素＞、なかでも意識の持ちようという、言語や文化の修得よりも難易度が低い獲得性が、圧倒的に優位となった。結果として、県内参加者の意識は、海外参加者のそれに近接していく傾向が見られた。

ところが2022年には、難易度の低い＜獲得的要素＞の優位性は継続して見いだせたが、「沖縄出生」が相対的に順位を上げた。「祖先」は2016年と同じようにランクの中ほどにあるが、非選択率が選択率を上回っている。その「祖先」は、海外参加者においては最上位であった。海外・県内参加者の沖縄アイデンティティの相違は、2011年に大きく、2016年に縮小傾向を見せ、2022年には再び相違が広がった。ただし、2011年のような「沖縄出生」を最上位とする＜生得的要素＞優位の沖縄アイデンティティは、もはや県内参加者におい

でも見いだせない。「現在の沖縄居住」なども選択率を下げた。

海外参加者と県内参加者の沖縄アイデンティティの共通点は、「主観」「愛着」という難易度の低い<獲得的要素>の重視であり、これは3回の大会調査データに一貫して見いだせた。2022年データの特徴は、海外・県内参加者のどちらも、「沖縄アイデンティティ」から実体験の要素が後退し、「祖先」という象徴や、「自分をウチナーンチュと思っている」という主観が最重視される傾向である。

「祖先が沖縄出身者」という事実そのものは生得的であるが、それを重視する意識はすぐれて獲得的でもある。そのような意識は、祖父母や親世代からの継承に助けられつつ、本人が自覚的に深め、系図を調べたり親戚を探したりすることで、アイデンティティの中核となっていくと考えられる。

その意味で、世界のウチナーンチュ大会は、海外参加者に貴重な来沖の機会を定期的に提供し、「祖先」に託された象徴的なアイデンティティをくりかえし更新させる機能を果たしてきたと言えるだろう。また大会は、県内参加者にとっては、海外生まれのウチナーンチュの規模の大きさと類いまれな凝集力をまのあたりにする機会となってきた。大会データは、「主観」が、海外・県内参加者の両方にとって、きわめて重要であり続けてきたことを示している。どこで生まれ育っていても、同じように「自分はウチナーンチュだと思っている」という意識を共有し、ウチナーンチュどうしで共感しあえるのが、世界のウチナーンチュ大会なのである。

海外参加者と県内参加者との相違は、それぞれの項目における選択と非選択の比率である(表4)。「沖縄出生」は、海外参加者の選択率が2022年に29%となり、過去大会で最も低いものとなった。県内参加者は43%で、過去大会よりも選択率は下がったが、海

表4 県内参加者のウチナーンチュ像と沖縄アイデンティティ

単位:人,%

	2011年			2016年			2022年		
	選択	非選択	選択率	選択	非選択	選択率	選択	非選択	選択率
出生	191	107	64.1	387	238	61.9	149	194	43.4
幼少期	109	189	36.6	395	224	63.8	80	263	23.3
生得的要素									
親	114	184	38.3	428	185	69.8	115	228	33.5
現在居住	118	180	39.6	375	242	60.8	99	244	28.9
祖先	113	185	37.9	442	171	72.1	145	198	42.3
主観	154	144	51.7	580	44	92.9	212	131	61.8
愛着	168	130	56.4	563	57	90.8	191	152	55.7
獲得的要素									
貢献意欲	125	173	41.9	550	71	88.6	174	169	50.7
文化歴史	72	226	24.2	453	164	73.4	126	217	36.7
方言	65	233	21.8	356	262	57.6	94	249	27.4

外参加者と比べるとほぼ倍の高さにある。「現在の沖縄居住」の選択率も、海外参加者は17%、県内参加者は29%と、開きがあった。「沖縄で生まれたかどうかや、今、沖縄に住んでいるかどうかは、ウチナーンチュであることの決め手ではない」とする、海外参加者ならではの沖縄アイデンティティは、3回の大会調査において一貫して見いだせた。これは、＜生得的要素＞の重視に対する批判的な意識であり、選択しないことがひとつの意思表示になっていると解釈できる。

興味深いのは、県内参加者の意識の変化である。確かに海外参加者とはいまだに相違が存在するが、10年前には圧倒的に優位であった＜生得的要素＞は、選択率を着実に下げてきた。その＜生得的要素＞において最も多く選ばれているのが「祖先」であることも面白い。これも海外参加者の選択率とは大きな開きがあるのだが、それでも海外参加者の沖縄アイデンティティについて沖縄県民が知り、共感を覚えるようになってきたのではないだろうか。2016年大会以降、大会会場には、沖縄県立図書館によるルーツ調査ブースが設けられてきた。そのブースの盛況を見て、海外参加者にとっての祖先のルーツの重要性を知った県民も少なくないと思われる。

3. ハワイ・北米・中南米の比較

2022年の大会調査データを、ハワイ、北米、中南米で比較すると、「祖先のルーツ」という象徴的なアイデンティティが圧倒的に優位なのは北米、次いでハワイであった。一方で、中南米ではこの項目が2位となり、ハワイと北米では選択率が低かった「愛着」が1位で、ハワイ・北米との意識の違いが浮かび上がった。「主観」や「貢献意欲」はいずれ

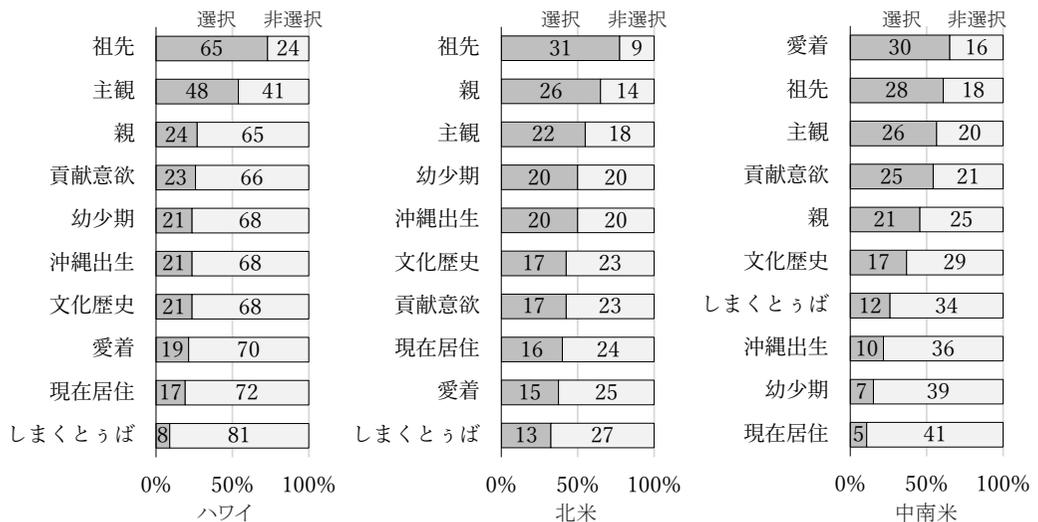


図3 海外主要地域のウチナーンチュ像順位（2022）

の地域でも順位の上層ではあるが、ハワイと北米では「貢献意欲」の選択率が過半数に至らなかった。下位は、中南米では「現在の沖縄居住」、次いで「幼少期の居住経験」が最も選ばれにくい、ハワイ・北米で最下位の「しまくとぅば」は中南米では下から4番目に位置しており、やはり相違がうかがえる。中南米は、ハワイ・北米よりも、回答者自身に当てはまらない「現在の沖縄居住」などが選ばれにくく、海外移民ならではのアイデンティティの特徴が顕著に見いだせる。

ハワイにおいて、「愛着」の非選択率が相当に高くなってきていることは興味深い。かつてハワイの沖縄コミュニティは“ウチナーンチュ・アット・ハート”を唱え、血統に拠らない沖縄アイデンティティをすすんで認め、コミュニティを地域社会に開いて沖縄系の諸活動を活性化させてきた⁹⁾。もちろん現代のハワイでも「主観」は重視されているが、「愛着」が低下し、そして「祖先」の優位が続くことから、沖縄アイデンティティにおける＜生得的要素＞がそれなりに優勢であると考えられる。一方、中南米では「愛着」がトップに位置づき、「貢献意欲」選択率も高く、＜獲得的要素＞が勢いを持っている。もしかすると現代の“ウチナーンチュ・アット・ハート”は、むしろ中南米において熱心に模索されているのかもしれない。そのようなアイデンティティの獲得性重視と、「祖先のルーツ」の尊重とが矛盾せず両立しているところに、中南米の沖縄アイデンティティの複雑な成り立ちと、今後の発展可能性が感じられる。

Ⅲ. ネットワークの実績と大会成果

1. 島嶼型ハワイと大陸型北米の比較

2016年と2022年には、参加者が大会に来る前から、どこの沖縄系の人びとと、何人の規模で交流をもっていたかを尋ねた（交流実績）。また、大会に参加することで新たに得られた出会いについて尋ね、今後の交流の方向性と規模を検討してきた（大会成果）。表5は2016年、表6は2022年の交流実績と大会成果を、参加者の主要な居住地ごとにまとめたものである。交流が向かうベクトルとしては、「住んでいる地域（州・県の範囲）」、「住んでいる国（自国内、自分が居住している州以外の他州）」、「沖縄県内」、「日本国内（沖縄以外）」、「海外」の項目を設け、それぞれの交流の人数を尋ねた。

2016年における大会参加以前の交流実績（表5）は、中央値で海外参加者全体を見ると、「住んでいる地域」と「住んでいる国」の交流の量は等しく、そこから大幅に減って沖縄県民との交流があった。海外の沖縄県系人との交流は、中央値がゼロと低調であった。ハワイは、「住んでいる地域」と「国」の交流の量が等しく、北米は「地域」が「国」よりもやや多かった。ブラジルは特徴が異なり、「地域」が「国」をかなり上回り、大会以前から沖縄県民との交流が見られた。これは、県人会役員など選りすぐりの参加者の比率が、渡航

表5 交流実績と大会成果（2016）

単位:人

	交流実績									大会成果								
	0	1<	11<	31<	51<	D	min	max	med	0	1<	11<	31<	51<	D	min	max	med
海外																		
住んでいる地域	60	122	39	16	29	266	0	300	5	48	87	55	17	14	221	0	150	10
住んでいる国	82	91	41	9	18	241	0	300	5	71	77	32	13	11	204	0	250	5
沖縄県内の人	120	81	30	7	9	247	0	200	1	72	93	37	5	6	213	0	150	5
他国の人	149	62	18	4	6	239	0	150	0	82	87	28	7	5	209	0	100	3
ハワイ																		
住んでいる地域	8	30	6	0	1	45	0	100	3	5	11	14	2	2	34	0	100	12
住んでいる国	15	18	3	0	1	37	0	100	3	9	18	5	1	1	34	0	100	10
沖縄県内の人	32	5	3	0	0	40	0	20	0	10	16	7	0	0	33	0	30	5
他国の人	36	4	0	0	0	40	0	8	0	16	16	2	0	1	35	0	100	2
北米																		
住んでいる地域	44	69	18	5	3	139	0	300	3	23	41	34	8	8	114	0	100	10
住んでいる国	52	52	13	3	3	123	0	300	2	34	42	18	9	8	111	0	250	5
沖縄県内の人	74	36	9	0	3	122	0	200	0	38	42	22	2	1	105	0	60	5
他国の人	94	21	4	1	0	120	0	50	0	50	39	11	3	3	106	0	100	1.5
ブラジル																		
住んでいる地域	2	10	7	5	10	34	0	300	25	3	14	8	3	1	29	0	100	10
住んでいる国	7	10	9	1	3	30	0	300	10	5	9	6	2	1	23	0	80	10
沖縄県内の人	11	8	6	3	0	28	0	50	2.5	4	7	5	3	3	22	0	100	13
他国の人	17	6	1	2	1	27	0	100	0	7	5	8	2	1	23	0	100	7

にハードルの高いブラジル参加者において高かったことも影響していると考えられる。

そして2016年の大会成果は(表5), 中央値で見えていくと, 海外全体では「住んでいる地域」が「国」の2倍で, 「国」と「県民」が等しく, 少し減るが「他国の県系人」とも新たな出会いを得ていることがわかった。ハワイは, 海外全体よりも「地域」と「国」の開きが小さく, 「県民」は「国」の2分の1で, 「他国」は海外全体よりもやや少なかった。北米は, 「他国の人」がハワイよりもさらに少なく, それ以外は海外全体と同様の傾向であった。ここでもブラジルは特徴的で, 「地域」と「国」が同じように多く, 「県民」もハワイや北米に比べて格段に多く, 「他国」とも意欲的に新たな出会いを結んでいることがうかがえた。

大会前からの交流実績と大会成果の間に大きな伸びがあったのは, ハワイの「地域」であった。新たな出会いとネットワークのベクトルは, 大会終了後にもハワイ諸島の中で顔を合わせ, 集うことのできる「地域」に向いていた。ここには「島嶼コミュニティ型」という類型の特徴が見いだせる。一方, ブラジル参加者が見せた強い交流意欲は, 国内の県系人どうしが容易に一堂に会せないという出身国の広域性を背景にしているように思われる。大会という貴重な機会に, できるかぎりブラジル県系人どうして結びつこうとする志

表6 交流実績と大会成果 (2022)

単位:人

	交流実績									大会成果								
	0	1<	11<	31<	51<	D	min	max	med	0	1<	11<	31<	51<	D	min	max	med
海外																		
住んでいる地域	24	83	42	16	23	188	0	200	10	44	56	43	9	14	161	0	200	6
住んでいる国	62	53	28	10	19	172	0	240	5	45	63	31	7	6	148	0	200	5
沖縄県内の人	85	56	18	4	9	172	0	100	1	37	87	21	7	4	156	0	200	4
他国の人	127	35	4	1	0	167	0	50	0	74	56	10	2	0	142	0	50	0
ハワイ																		
住んでいる地域	4	13	6	4	8	31	0	100	10	8	10	10	3	1	32	0	100	10
住んでいる国	13	3	8	3	5	32	0	200	12	13	11	7	0	1	32	0	75	2
沖縄県内の人	22	6	3	0	1	32	0	100	0	12	15	2	3	0	32	0	50	2
他国の人	29	3	0	0	0	32	0	10	0	25	6	1	0	0	32	0	20	0
北米																		
住んでいる地域	4	8	8	2	1	23	0	130	10	8	8	3	1	0	20	0	50	2
住んでいる国	6	9	4	3	2	23	0	100	5	8	9	5	1	0	23	0	50	10
沖縄県内の人	9	8	4	0	2	23	0	100	2	8	13	2	0	0	23	0	20	3
他国の人	18	5	0	0	0	23	0	10	0	12	9	1	0	0	22	0	12	0

向性が、「地域」と拮抗するだけの「国」内の交流成果に結びついたのでないか。ブラジルは、「県民」や「他国」との間に新たに得た出会いも群を抜いて多く、2016年大会の交流成果を牽引していた。

これを2022年データと比較してみよう(表6)。海外全体の交流実績を中央値で見ると、「地域」が「国」の2倍となり、両者が等しかった2016年とは大きく異なる特徴が見いだせた。「県民」と「他国」は、2016年時点から低調であったために違いは出なかった。北米は、2016年と同様に海外全体と同じ傾向であったのに対し、ハワイでは「国」が「地域」を上まわるという興味深い現象が生じた。海外全体と北米における「地域」の中央値は、2016年に比べて2倍以上であった。背景としては、コロナ禍にもかかわらず来沖した参加者は、県人会長などの役職者をはじめとする選りすぐりの県系人であったことが考えられる。とくに「地域」の交流実績が2016年に比べて多いのは、コロナ下で県人会が存亡の危機に立たされたとき、地域における県系人のポテンシャルが、最大限に掘り起こされたのではないだろうか。ハワイでも2016年に比べて「地域」は伸びているが、もともと島嶼性というアドバンテージがあったため、大陸ほどは伸びの余地はなかったかもしれない。ハワイでは、むしろコロナ下で急拡大したオンライン・ネットワークによって、島嶼性に限定されない新たな出会いとつながりが模索されたことで、「国」が伸びたのではないか。交流成果は、2016年と同様にハワイでは「地域」に、北米では「国」にベクトルが向いていたが、大会

前からの交流実績が高かったところではそれ以上は伸びにくかったと考えられる。中南米の参加者も分析したかったが、欠損の少ない票数がわずか15であったため断念せざるを得なかった。

2022年データからは、ハワイの〈島嶼コミュニティ型〉が継続していないことが見いだされた。その背景としては、コロナ禍によって対面の活動が制限され、またネットワークのオンライン化が急速に進んだことで、必ずしも島嶼性に制約されたり特徴づけられたりするものがない集いやつながりの形が広まったことが考えられる。

2022年におけるもうひとつの重要な特徴は、「県民」との交流成果が、海外全体、ハワイ、北米のすべてのカテゴリーにおいて、2016年を下回ったことである。背景として、大会会場において常にマスク着用が求められたことなどのさまざまな制約、大会期間中の悪天候なども影響したと考えられる。しかし2022年の海外参加者が、コロナ禍にも航空券の高騰にも屈せずに来沖したきわめて意欲的な人びとだったこと踏まえると、大会が海外参加者と県民との新たな出会いをあまり豊かにはもたらさなかったことについては、批判的な検討も求められているように思われる。

2. 県内参加者の交流実績と大会成果

2022年における県内参加者のデータでは（表7）、大会の成果、すなわち何人との新たな出会いが大会によって得られたかについて、「ゼロ」という回答がきわめて多かったことが、海外参加者とは異なる顕著な特徴であった。「新たな出会いはなかった」という県内参加者が過半数を大幅に超えたことは、やはり検討を要するのではないかとと思われる。

大会は、沖縄県最大のコンベンション事業として、盛大な開催という意味では間違いなく成功してきた。参加者による満足度も、とくに海外参加者において高い。しかし、主要な大会場では参加者が観衆としてステージの周りに座っており、参加者どうしが言葉を交わす機会は、言葉の壁もあってあまり豊かだとは言いがたい。そもそも巨大なイベントであることで、実質的な出会いやふれあいが限られるという面もあるだろう。これまでどおりの大規模な開催を重視し、大会ではウチナーンチュとしての一体感の再生産を目標にして、

表7 県内参加者の交流実績と大会成果（2022）

単位:人

	交流実績									大会成果								
	0	1<	11<	31<	51<	D	min	max	med	0	1<	11<	31<	51<	D	min	max	med
県内																		
沖縄県内の人	16	41	19	4	11	97	0	300	10	64	30	1	1	1	97	0	100	0
日本国内	43	44	7	1	2	98	0	100	2	78	13	2	0	0	93	0	30	0
海外の人	59	29	3	4	2	97	0	100	0	68	26	0	0	1	97	0	90	0

実質的な交流は他の機会に委ねるのもひとつのやり方かもしれない。しかし、大会という特別な機会だからこそ来場する人も少なくない。そのような参加者が、会場においてお互いに出会いにくく、つながりにくくなっていたことについては、何らかの改善が試みられてもいいように思われる。

IV. 結論

本稿の前半では、「ウチナーンチュ像」をめぐる回答から、沖縄アイデンティティの持続と変容について、海外・県内参加者を比べ、またハワイ・北米・中南米を比較して、それぞれの特徴を考察した。2022年において海外・県内参加者に共通していたのは、沖縄アイデンティティから「しまくとぅばが話せる」「いま沖縄に住んでいる」などの実践や実体験が後退し、「自分をウチナーンチュだと思っている」などの意識が圧倒的優位となったことである。沖縄アイデンティティは、客観性よりも主観性に大きく傾いてきたと言えるだろう。その中で「祖先のルーツ」は、生得的アイデンティティとして唯一、きわめて優勢でありつづけているが、「祖先」の重視もまた、沖縄出身の祖先がいるという客観的な事実には留まらない面をもっている。沖縄出身の「祖先」の存在そのものは生得的な事実であるが、それを重視することは意識の働きである。「祖先」がアイデンティティの拠り所となり、きわめて重要な象徴となってきたことは、客観性に支えられつつ、すぐれて主観的でもある。2022年データから見えてくるものは、「意識と象徴の沖縄アイデンティティ」なのである。

沖縄アイデンティティから実践や実体験が後景化し、意識の要素が突出してきたことについては、脆弱性もまた指摘できるであろう。アイデンティティは、帰属意識だけではなく、日々をどのように生きるかという行為の実践と深く関わっている。沖縄アイデンティティにつながる日常の実践は、おそらく孤立しては続きにくいだが、大会終了後にもゆるやかにつながりあうネットワークがあれば、コミュニケーションの中で自然に継続したり、積み重ねられたりすることもありうる。しかし2022年のデータからは、大会において新たな出会いと交流の芽が十分に育まれているとは言い難いという状況が見いだせた。沖縄アイデンティティは、その類いまれな強さがしばしば称揚されてきたが、主観性に大きく傾いていることの脆弱さを課題として認識し、大会のあり方を含めて、今後に向けて問い直すことも可能であるように思われる。

これまで筆者が大会調査によって検証してきた「沖縄アイデンティティの構築性」という仮説、そして<島嶼コミュニティ型>と<大陸ネットワーク型>という二類型については、2022年データによって見直しがいくつか生じた。「ウチナーンチュ像」の項目における「沖縄出生」や「現在の沖縄居住」は、海外参加者にとっては自分に当てはまり

にくく、選択率は一貫して低かった。この傾向は、2022年において拡大した。一方で、これらの項目は県内参加者からも徐々に選ばれにくくなってきて、2022年にそれが顕著になった。自分に当てはまる項目が「ウチナーンチュ像」に選ばれやすく、そうでない項目は選ばれにくい傾向は、海外参加者においては持続・拡大しているが、県内参加者においては変容してきている。

ネットワーク分析では、〈島嶼コミュニティ型〉ハワイの特徴が、2022年データにはほとんど見えなくなっていた。2011年と2016年のデータ間では、持続性が顕著であったが、2022年データとの間では、持続した要素がありつつも、むしろ変容の傾向が浮かび上がった。その変容は、コロナ下におけるオンライン・ネットワークの急拡大などの社会変動からも影響を受けている。このような変容もまた、沖縄アイデンティティが常に変化し、新たな構築を続けている過程としてとらえられるのではないだろうか。

沖縄アイデンティティとネットワークのありようが動的であることは、2006年から2022年にかけて、4回の大会調査を継続的に実施することで確かめられてきた。県民の「ウチナーンチュ像」でも海外参加者が重視してきた「祖先のルーツ」が選ばれるようになってきたことなど、多様なウチナーンチュは影響しあい、新しい沖縄アイデンティティを獲得しつつあるのである。

本稿では、沖縄アイデンティティにおける意識への偏りを指摘したが、それが今後、どのように乗り越えられていくのかということにも興味は尽きない。沖縄アイデンティティが、主観性とともな豊富な客観性を発揮していくまでのダイナミックな過程を、これからも注視していきたい。

付記

これまでの調査に回答くださったすべての皆さん、各回の沖縄県世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局と共同研究者の皆さん、空港調査でお世話になった関係各位、調査員として力を尽くしてくれた学生諸君に深謝します。

注

- 1) 第7回大会は初めてオンラインを併用したハイブリッド開催であったが、主催者が発表したオンライン参加者数と、大会期間中に筆者や共同研究者がフォローしていたオンラインイベントの参加者数に隔絶があったため、ここでは対面参加者数のみを記した。
- 2) 第4回大会調査は、文部省科学研究費補助金基盤研究（B）「沖縄社会の越境的ネットワーク化とダイナミズムに関する研究」（代表・金城宏幸）の一環として行われた。共同研究者は、楢塚健太郎と筆者である。その成果は、琉球大学移民研究センター『移民研究』第

4 号に記載され、2008 年にロサンゼルス、ハワイ、ブラジルで成果が報告された。第 5 回大会調査は、琉球大学の「人の移動と 21 世紀のグローバル社会」事業の移民研究班を中心に、金城宏幸、前村奈央佳、崎濱佳代、佐久本義生と筆者が調査を行った。その成果は、『移民研究』第 8 号に記載された。第 6 回大会調査は、文部科学省補助金基盤研究 (C) (代表・加藤潤三) と同若手研究 (B) (代表・前村奈央佳) の一環として行われた。共同研究者は金城宏幸、酒井清、山里絹子、メイレス グスターボ、石原綾華と筆者である。その成果として、大会が沖縄社会に及ぼすインパクトを論じた金城宏幸 2008、ハワイの島嶼型とブラジル・北米の広域型ネットワークを抽出した拙稿 2012、沖縄系ブラジル人のエスニック組織について分析したメイレス グスターボ 2018、沖縄県系人の価値観をめぐる地域間比較を行った加藤潤三・前村奈央佳 2018、「ルーツ観光」に着目した前村 2022 などがある。そして第 7 回調査 (2022 年) は、JICA 緒方貞子平和開発研究所による「日本と中南米間の日系人の移動とネットワークに関する研究」プロジェクト (主査・長村裕佳子研究員) の一環として、琉球大学の教員・元教員を中心に、県外の大学からも専門の研究者が参加して調査実務に携わった。メンバーは加藤潤三 (調査実務統括)、藤浪海 (大会調査班事務局)、長村裕佳子 (研究プロジェクト主査)、前村奈央佳、メイレス グスターボ、小波津ホセ、山里絹子と筆者 (大会調査班代表) で、上記の所属はすべて調査時のものである。いずれの大会調査も、世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局にご協力を頂き、同事務局と合同で実施された。継続的な調査であるが、第 5 回大会 (2011 年) 以降に県民参加が拡大すれば大会調査もまた県民を対象に含めるなど、大会の動きに応じて大会調査も変化してきた。また新規に加わった研究者の関心に添い、いくつかの設問は更新されてきた。さらに県内参加者 (県民) に対しては出身地や移民世代を問わないなど、質問紙を使い分けてきた。

- 3) この設問および選択肢の構成は、2011 年調査では琉球大学の社会学専攻が 2006 年に実施した県民意識調査で用いたものをそのまま用い、2016 年調査では重みづけがわかるように更新したものである。安藤由美・鈴木規之 (2012) 参照。
- 4) 野入 (2012) 参照。
- 5) 野入 (2008) 参照。
- 6) 野入 (2008) p.34 参照。
- 7) この設問および選択肢の構成は、2011 年調査では琉球大学の社会学専攻が 2006 年に実施した県民意識調査で用いたものをそのまま用い、2016 年調査では重みづけがわかるように更新したものである。安藤由美・鈴木規之 (2012) 参照。
- 8) 土田 (2007) 参照。
- 9) ロナルド・ナカソネは、世界のウチナーンチュ大会の開催が「世界のウチナーンチュ」

という新たな沖縄アイデンティティを打ち出し、押し広げ、沖縄アイデンティティを世界規模に汎化したと述べている。ハワイの沖縄コミュニティにはそれ以前から“ウチナーンチュ・アット・ハート”という広やかな意識があったことで、とくにハワイでは「世界のウチナーンチュ」という新たなアイデンティティがすみやかに受容されたという指摘は示唆的である（Nakasone 2002: 139-141）。

参考・引用文献

- 安藤由美・鈴木規之編著 2013 沖縄の社会構造と意識 — 沖縄総合社会調査による分析, 九州大学出版会.
- 加藤潤三・前村奈央佳ほか 2018 沖縄県系人における沖縄アイデンティティとウチナーネットワークの検討～「第6回世界のウチナーンチュ大会」に関する基礎的分析と合わせて～ 移民研究, 14, 1-20.
- 野入直美 2008 「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク（2）— 参加者の〈声〉に見るアイデンティティと紐帯の今後, 移民研究, 4, 97-115.
- 野入直美 2009 「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク（4）— 中南米からの参加者の特徴を中心に, 移民研究, 5, 27-40.
- 野入直美 2012 構築される沖縄アイデンティティ：第5回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートを中心に, 移民研究, 8, 1-22.
- 野入直美 2018 主観と愛着の沖縄アイデンティティ：世界のウチナーンチュ大会調査に見る海外沖縄県系人の意識, 移民研究, 14, 35-58.
- 第4回世界のウチナーンチュ大会実行委員会 2007 第4回世界のウチナーンチュ大会報告書.
- 第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会 2017 第6回世界のウチナーンチュ大会報告書.
- 第7回世界のウチナーンチュ大会実行委員会 2023 第7回世界のウチナーンチュ大会報告書.
- 土田映子 2007 「エスニシティ」概観：コンセプトの形成と理論的枠組 国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書 グローバリゼーションと多文化共生, 68, 219-239.
- Nakasone, Y., Ronald 2002 *Okinawan Diaspora*, University of Hawai'i Press.

（のいり） なおみ・琉球大学人文社会学部・教授・社会学

Conscious and Symbolic Okinawan Identity: The World-Wide Uchinanchu Festival Survey Results from 2011 to 2022

NOIRI Naomi

University of the Ryukyus

(Sociology)

We discuss on the overseas Okinawan's ethnic identity, examining the survey data of the fourth, the fifth, the sixth and the seventh World-wide Uchinanchu Festival in 2011, 2016 and in 2022 in this paper. Innate factors of Okinawan identity, especially "Born and grew up in Okinawa" was decreased, while winning factors, especially "Subjectivity being an Okinawan person" was increased. Only one increased innate factor was "Roots of ancestor".

Keywords: "Worldwide Uchinanchu", Oversea Okinawans, Okinawa identity